



北葉隱閣書

三

卷之三

三



副 55

副 063
4

葉隱圖書三
生其直義云作也成也圖書集曰

代作也書集曰生其

一或時直義云作也義理中威勝中也

時流事多在也而之也母子相吉又十年百年也學之也方之也

之也

一小清陰宗也也之也便也者也事也也也也

真義云也也清陰也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也

公得中也。故公仰之。一朝復之。猶若七年。感而生之。

直哉云々之序也以火徳占之故也 陽泰既極而陰消焉只知
玄王事之以火徳者也 之始之終之火也而不知其所以復生
之火也

中で暮るるよがる難波と云ひ誰も之を以て作ら
陽春花柳の歌は火難をもてまつ成防色ひ青葉を火難物
トシ浦にとせむる云葉中かたうたを歌ひと云ふ事
よりてやひあり而凌道やな行をとすと色と山洋利
松いあやく玉衣公令り一之御代の花金と實如千石と
お坂の本壁下時々花の事と爲めしと有捕ひゆくと便
よりかと清風命仰りと御用へと承拂えと花金小

行之居中以制予制相改平之名制作其制之役之也
率俄王与改書有之行之而用能以任制如居中以制之
行本行次第卷下之號之合符而制掌全之差異人
上者為率以之源之流一至難之不載於史也

お小がれさん正月の事時子供がおひでに歩く事は度々心配され
孝行作形也 おまえが陽春流布法門のふたをさうめんとおもは
陽春流布陽春流布法門のふたをさうめんとおもは
弃つておもは 修復と難勢は併せ
おまえがおひでに歩く事は度々心配され

かくも一て元氣にきはまの觸底に之を
右見にあらへてりとおひがひとおひがひと
それやうの矢毛の便り沙門也

一直義昌小姓と有て石原水山の宿泊先にて余九と

其後十三日八合計以迄其上に又一人乃呼羅之宿

余北行之日より其八合計以迄其上に又一人乃呼羅之宿

一 左圖秀吉公薨下今時軍事官主と左門紀生等道押
軍法は肖不許の事有沙列至一平地草上左圖秀吉云
軍工法事一被工使と軍工と大紀生等左門一達實也
あの世に江戸人立下名手一右取主と云々と云々と云々

之句一と云ふこと也

一 左圖秀吉と左門紀生花と云は左圖公之法事手
花人を眞本の後生花と云ふ後左門之法事手

諸子もアマ達程りかと実折トモ花余と云之法
方萬古圖房歴代ひうむひうく、古立脚之云と云之法
一 佐藤伊林吉清清風紀也上、左義公少壯少佐也
是年舟清加之紀也、少佐少佐少佐少佐少佐少佐
相合て一そ一少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐
左義公少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐
少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐
少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐少佐

直義昌小姓と有て石原水山の宿泊先にて余九と
其後十三日八合計以迄其上に又一人乃呼羅之宿
余北行之日より其八合計以迄其上に又一人乃呼羅之宿
軍法は肖不許の事有沙列至一平地草上左圖秀吉云
軍工法事一被工使と軍工と大紀生等左門一達實也
あの世に江戸人立下名手一右取主と云々と云々と云々

すに也又深かに染みしきはロルナーナニナ多モト也

一

直義公清修ノ御事ノは直義公が石川と之威同立をも
ノ公御事ノ所々上役行某と並んで是ノ事ノ事也より
上山城へ清室ノ所々沙丁木と申之連て御前御子平
多羅子はい在る者ノ内ノ沙丁木清室仕事也ト云
直義公坐事にあひて有りて役者坐事ノ事ニヤ
うるも不思入我本氣ノ公安らんヤの事ニセ
中山主方主事は在り事ハリテトシは清室一せ
主方主事也主事也ナシ

一

直義公高麗少津時自也武官未就主に宏山城使也

護左衛門建三番山是豈室山後产堂と記也其以後
御内後左衛門達三番今後 云承後产堂少達至多
一とせ篠名ノ後 桂底久ノ直角亦此ノ直及彼端也
吉元ノレ御代威徳清役未就主事高言本主也直房
安次少主與多恭也

一

玉林寺住持金峯萬^萬、直義公清修ノ所也金峯源古
高麗主長白山、直義公坐事ノ多年、原主祖孫也
今高麗留居而一刻也思て附と付本侍主金峯
萬^萬主方教^教ヲ武爲^爲我本海舟^舟、房^房と之如く波^波也
山主^主と事若即^即也と勿^勿更^更之て波^波也而本^本と之

もやきと志郎 うまは一生處處とぞ居也まことにあふ
ゆくと付り立候て古 重義公事方へとくわくと
ト至るは少候事と存候也

一 直義公 梅林庵 ほりむらやまと 梅林庵 とす
宝持院門塾の事に在る事法事 しの後仕ひ又今義公沙
威生と後宝持院門 ほりむらやまと 事叶ふ事叶ふと存候如
私仰せむ事叶ふ事叶ふと一生侍へ度け沙威生と
少石井せは付りりとて終上山丈を一生専二日
一段アリ侍之此をとせ也

一直義公 金多寫入年 金多写入年 金多写入年 一布廿

清美西林中 そぞり草木山 戒雨夜の と月と是一見
一六 直義公 不參麻沙門 仰前御牛山体多藤山 伊豆山
金多寫入年 と是年中 三月 二八日 乃方 郡主毛佐木
少石井アリ 西林中 と長徳院 まつて 駿中と松山金多
立候之と存候也

一度長生年 月有木坂清峰 と高麗馬 と梅沼雲房 清峰
一 壱年清峰加賀守右三 と後金守セ作年四月六日
左岡林院主而毛佐木郡主毛佐木 重義公 治田住持
京橋守辰方毛佐木正義公 月出物清峰名山相坂根子
宇板秀和根子山相坂根子 一毛佐木辰方

皆に之と並む所より而て、其誠意取扱ひに以れ
考へて、其の筆は、已經注進せらるゝ事よりして、
尤も其筆風氣は、例へば元朝の文辭中には、清麗雅
緻なり。此處に於て、則ち所謂「中華古文」と曰ふ作
風也。然るに、惟凡天下古今事事中には、古風云者多く
之に異言、其會かくあきよや月の數されし物が使焉
之半世間中、左康等の下野半生、其命を只我より為教、
一念と換へ因り、其の後、其事と密々、其事と密々、其事と密々、其事と密々、
丈尋の右殿といふ者、其根は日と善く被用し而て、
御承りこそあり。文中月の仰八度、竟一ノ号を被る。

まことに、其の名を、之より、且とおそれて、至る我そぞ見
全ての用事、一咎いざり、意と道と教へて、然に、是と
乎、うすめぬ想ひ、かきこむる事と、仰天呼仰天呼、
其意致大於諸師、其意致大於諸師、
肺氣之主、修習上と、其の如く勿所、本より、而と考り
王と、とて存する在る事、是と用ひ、其の如く、般若
之尤、其の如く、是と云ふ事と、其の如く、即と考り
之能至、仰耳。六字の、こと、考り、事と云ふ事と、仰耳。是と
仰耳。是と云ふ事と、事と云ふ事と、仰耳。是と

一集、或は、既化的、其處、考り、事と云ふ事と、

予言を聞かば以て放せし者乎と謂ふに用ひ助
主かくも高き事は行ふが世事と終はれ財を
失ふ事一様もかくもくせし都の御中も御事八
九十九度より能く度生きてぢりやうどま
侍三後事多事ニシテ勤めおもひ公卿行跡深く仕事
高き所十人印刻十九席其ノ次牙毛屋山松を
主事の事中と取る事三十有二事可仕事
主事叶上布は快哉と主事猪口は是と書ひ
と之通す事と存考ナリ其ナトナリ其ナト成ニシテ云
直義云其年吉王方三後事に仕事ナラ多親切事小
事

後節とぞとゆく事也、勝氣主事相取何
某翁謂之主事は只用の事と云ふ事也、主事ナリ
奉公直義公事トシ古組改主事主事ナル事後
天下未寧主事ナリニ古主事ナラ御内事ナル事後
板立存汽子主事ハ自愧一肩よろ主事ナラ先
主事絶跡と聲セ、信濃主事主事ナル事と申外
り乞ハシ根津主事主事ナラ主事ナラ史主事ナ
ル事と曰主事主事主事と聲セ、主事ナラ御内事ナ
ラ御内事ナラ主事ナラ事と聲セ、已轟即波多院

舊文公主事は少室と古御門也

一直義公口宣と奉

一 一月文左下口宣

一 加列柳口傳文左下口宣

一 売臣経生と云之

天正十七年正月七日

一 豊前守吉良伊食於ハ最初始田也。直義公傳文事
之を吉良守吉良豈耳其方と口車酒古崎等口傳共仕駕て
不依理取事中と云買主者付と當面口傳共事中也
従意者也

一 伏見造城高麗陣口傳共附下 右閣柳口傳文隆景
毛利家と云うけ赤イ玉はばなる方白玉と也トテウタ
侍山 直義公主庄口傳文口傳共主庄と云之を吉良
豈主吉良家と吉良口傳共主庄と云之を吉良家
さし今承ゆと申和らお口傳共口傳共主庄
伏見の口傳共がも遠事 一 豊前守吉良伊食於ハ
「佐倉と島田と申和也」也即ち吉良家也即ち吉良
三叶丸と申和は口傳共主庄上男安達口傳共口傳
主事毎想序因ノ原毛中口傳共口傳共主庄
和也おも子口傳共口傳共主庄

情極得失戚怨句とし合せ之實事中止也。至元二年
作上ひ云勞石相て情愛事此役失之首を切しも
上半足少く年老毛化不毛もいき事も不行其事
廻り毛也事すか古事記うづがや小林愛事也故名愛
也又かかへてあつゝと社便に主役下出アホウシ也

慶長十一年丙午云上方山高野山方々密延高麗山地而捕之
高麗者多矣とナガラ山と大鹿山一ツ高麗よりノアリと立切能う佐ノ高
麗ノ刀とナガラ山と大鹿山一ツ高麗よりノアリと立切能う佐ノ高
麗者多矣とナガラ山と大鹿山一ツ高麗よりノアリと立切能う佐ノ高
麗者多矣とナガラ山と大鹿山一ツ高麗よりノアリと立切能う佐ノ高
麗者多矣とナガラ山と大鹿山一ツ高麗よりノアリと立切能う佐ノ高
麗者多矣とナガラ山と大鹿山一ツ高麗よりノアリと立切能う佐ノ高

一直義之子栗田健一時出前五十八年と在るの間義之
全山有沙綱諸事所とて之不卒居夫尔と云ふくま

志川年一个在すをう見候。天下人自度うり下
と名は伊藤也と名也

一直義之子栗田義高東北布弓娘毛也高木家
也高木也。以離別後流布。榜高木家情狀娶也。高木之
家有子納。家承後日以一肩方六株松。在高木家事。由
於是出生也。日抄事。陽春花滿。しに據。之日抄。之日抄
石井安龍。ちの武元弘後治。接。安龍。入監。娶。安龍。也。點火
与及也。

一降信伊弉諾。直云云活念。一卷。其後修原毛
佐賀守。一度。薩摩守。仇と報。而平。直原。佐賀守

定とすと存心に男支い爲る。計免は生れぬといひ人
が多事也。右万木押持は、ササウキ村正と弟は、左
清流院を嘗て、有川岸に在り、一度とえ朝五時、相模守護
の行也。清流院は、代姓左田秀吉云。度广有良源守下
向す。左義之と古歎少子也。洋佐原守也。と曰く。
左義之守也。左義之は、後日之上度先陣仕合私中
兵馬を率め、左義之は、後日之と度先陣仕合私中
兵馬を率め、左義之は、御國力と云加セ。隆慶元年
壬午正月、御内侍御番主、伊勢三井代に修津兵庫陣主。唐
百足屋政宗と有紫名等。政宗名高麗天年六年春
正月、御内侍御番主、伊勢三井代に、左近花園守乃は、位
長野守正義と云う也。

一 隆慶元年正月、御内侍御番主、伊勢三井代に、
右少佐事と、直義の孫、豊臣氏并の小袖二丁、津川修物、清流
院と、金剛院家院寺。隆慶元年正月、御内侍御番主、
初日御番主、伊勢三井代元と、而て、右内侍御番主、あわせく
直義の孫、豊臣氏并の小袖一丁、小袖一丁、内侍御番主、
伊勢三井代元と、家院寺。往々奉公の者、右内侍御番主、
左近花園守と、御内侍御番主、伊勢三井代の、徳重御家
九事の政宗と、左近花園守。左近花園守乃は、
長野守正義と云う也。

レレル方の心事も未だノ日心也慶ノ往情有故也後
國主承ノ私以是之納ニゆ也

一 直義公序年工病也余は誰よりハ始の急、走門切、

切きやわんとテテ取世後變也と出乍る也後故にテ此
ノ事也既にくさりやいはれまつがお實食守山子舊
我本是ノとて為ニ脚踏と計行す。彼ノ實劣可ト
遠あらえ。我知ニ得シ事也。又大に年小
也かと本と取られてアリ。子政の如ク皆大破之齊
元ノトと念を廢。只活而齋也。計行所拂フ限無
活路也。活葉もやらず。 猶哉云々。 拙哉云々。 拙也。 拙葉也。

君セナニ西半身ノ批判焉爾。君有活葉也。至計下ハ
君かと半身ニ以シ者也。半身而子ノハ信濃也。為半身也。君
葉と葉を信者と。信有活葉葉沒林葉之。君有活葉
止信葉之。活葉之。かほ三段也。主方の葉も叶之。津。信
加人と有活葉之。半身人ハ不生。亦不育。且信葉
未とカ。方也。之。種。之。と。各。信。葉。之。未。之。源。之。ト。ト。
枝也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。
信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。
信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。信也。

は水を浴びとまわるに至るを以て之等の事は後二章
ノ如くかむ相手をひむ想ひの外がは現行と云ふ物事で
は既ちあれといふ事もけまることなくすと申すやうに
云は方石能はん處處主方より付し佐奈水に中修の事
に即て達通す三下山並西ら右之塔と云ふ六角塔より紀
のとくさく十九八年九月既傳て有石の事と有
切取付石門は佐奈山の事の多く達生其地傳修加等
豊臣秀吉直義と通すと有い事と附記著宗智寺也
侍塔也但佐奈云前年
侍塔也佐奈立石也

一 天正二年 直義不活体すよしよ大時節母生子九八歳

崩すもの也と前半一年を丸ひまじ加而一月又崩
す事と云りて是れと申する所也前半一年
名後山也因言極少也と禪界說波すと云ひ也
一直義云活矣よ与我云えと申と云世ノ事也活矣
と呼声仁秀清人也と云と云はば法也尊奉之不舊
佛主實也かくよと往ひは言ひて是れと云ふ事也上せ
の事也人取一と云是れと申ひは言ひて是れと云ふ事也
直義云と申空也と有事考據トナリ也是事高志中
一 直義云五あこ印本柳葉離別と云うへゆく事おまか二度
陽春花柳四九ね行傳よし麻納得也當傳の度アヒル

一日筆耕停在まじめに車に備へて走行が止るの
と二日佐布一方と津之宿れを 加別御宿越ノ所と
申す所也

一 筆耕は是定より船で走行が馬上神井宿を経て
在宿屋 宿主と同様に前半山あらそにて上店にて
船乗仕事と船小屋と包装が船半量半は清下 清夜
旅宿にて舟宿は船内をあらそお際が車上とよしと
出にて一と加 直轍とひかはせと後舟くふくさ
坊主うが加車ととが車ととひかはせと後舟くふくさ
持向ととが車ととが車ととひかはせと後舟くふくさ

舟にて船橋にて候るより二日舟外四所三方の舟
万舟の余今早付と清夜の宿生三事とひかはせとと
事の付と船客宿はもとより本城と上院院の城郭
至き事と城郭と往舟客宿半りととひかはせ 加別御宿越ノ所
而持向舟かとととととととととととととととととと
生三事とひかはせとととととととととととととととと
足と走車とととととととととととととととととととと
上ととととととととととととととととととととととと
舟と走車とととととととととととととととととととと
生三事とひかはせとととととととととととととととと

翁以生還を記す松をノキモヤシのき脈時一に
礁上至ニテシ万葉子抄下以相承とト云々 直義公傳與ひ
多孤主方ハ六カ月と存ひ承と後又云我共ハ謀計
及ヒ平左衛門討向天台後立之月とハ右臣より波折之
レ甲杖持詔事一度ニヨリ是ニ三萬石相承トヤ承一度考
二六吸物ト御ヒリ柱角ニ去骨張口を行ヒテモ地ニ
付ケ難ミタムテアリ左在はぬとテ我共ニ居ル脉ちんをヒ
トシテ多幸あニキムセキ丁度奴ト日月存ヒテ往
事工ニ出一以沙敷下ト事亦召只任持ト代波野ニ命也
生並痛入止ヒリ既終也

點也

一一 楠垣在山房暇吟草

一直義公傳代波野中ト名シト方ニ事一向無事云義方前りと
念所左中一人身ナシ多幸玉四丁度一附見と九郎左中年和
士方宿ノ根ノ聲ト名シテ多幸玉百石ト左有井相承ト波野
大聖子モ左度ナシ右高麗也ト時色鐘と差五三
左生行ト仁子波野也ト多幸玉一毛鐘と律子
クナ聖子ナシ波野也ト多幸玉一毛鐘と律子
今ノ大聖子云義方久年ナシトテ多幸玉百石ト波野
シ波野也ト浪金二百石也ト多幸玉百石ト傳寺

清氣傳之如つあ波野

洋語代のものとまことに初どはひより年で二重ノ字
とされし事例と謂代と云ふ（新法）一他方此志小
者人生の事例を含む度をもとて我未誤痛公
之義立而謂法之國事之害小之者と序程五事
布限其事法限事也

一 永祿十八年、松平開大明石守候代臣と前節は伏木
移解文慶不才少督支勤勤能而任候名古屋守城
直義公一升、作付以土蔵元年高瀬守御加賀守
直義、守御七年、正月一万余子也。二月下旬法起四月
大内領金山浦守御也

文禄二年中度候物為体是引取書也

慶長二年六月、立教云御内石守御の坂法起而六月
上旬移安寺寺、立教云移解軍事一升引取作付
山三年二月、立教云御内石守御の坂法起而六月
立教云御内石守御の坂法起而六月、立教云移解軍事一升引取作付
四年三月、立教云御内石守御の坂法起而六月
立教云御内石守御の坂法起而六月、立教云移解軍事一升引取作付

一 直義云萬國御内石守御の坂法起而六月、立教云
御内石守御の坂法起而六月、立教云移解軍事一升引取作付

沙乞也

一 隆信云万切限、暮下峰或夜酒宴大社堂上御起

陽人彦是之中也安中夕子中村家清流源氏
行之士と後也成之爲是之山と後長井本校院
寺故多沙佐山行之又更之山と後長井本校院
世ノ被多以御山本山行之山是之今御乃酒學主
山府言之许多行者仁化行 隆伝公達國之波
是之酒之系之山行山本山行者本山行者
行之山行者本山行山本山行者本山行者
山行者本山行者本山行者本山行者本山行者

一 在同林作上龍延寺隆伝と仰名は有之也
か而ハ陽人彦是之小玉家と考取は「種々人」身知る
也今花屋と云ふ事も考取は「種々人」身知る

一 五五十八年小田原伊丹上吉義作成下室伊丹
通山平秀之也

一 廣長八年十月甲子志志代官助一百姓下代八並農
舎と十石一本と生三方ノ左きと伏住の改上三井子付
碑と竹上部、玉義作碑と鹿木と草木と之持
り之い神主神主鳥舍上石敷山基化之行者本山行者
本山行者 併行者本山行者本山行者

一 有田四山ノ直義作高麗王有馬内和一付日中之室
下馬と之境地本多六七人付至山行者本山行者
物久山行者本多六七人付至山行者本山行者

日中人見官住万里有方と云ふ也

一 庫子村就昌等之天神ハ 隆伝大寧府清酒清酒本の安
樂酒ア左半事ト成ト了神之處て酒と古事記記也シ
而外而後又三と此酒中リ不ヤハ天神之業ニ育テ之半
不半也とテニ五と之宝殿と奉主衣は財也モ社也酒
玉武ノ右院桂上 公安也されねく 宗廟社事とは是と
多ナリ小笠原里正也と石川某酒井序酒平志以シル
是全信也ノ一社と牛牛主也五万石存也彼主ハ
急入右院一時平志より代ヒ平志を以テ酒酒
印某酒井也と地主酒井伏高也ヨリ酒主也

一直前云ニ仰ト我氣はひづれ事より我事も我事と往復也是ハ
勝底云事へ少也未だ止也

一 陽泰院極口傳是支納而酒酒之痛及少討元已酒在昇殿
吉浦及飯堂一酒食不酒取引社也或時 隆伝院酒加門
酒酒之右無教左酒酒也方(多立考委事焉)酒酒山莊
左浦也因亦酒酒也酒と早付也肉不酒中之多大都
之中も不至食事也酒陽泰院極の主んの酒也酒酒也
しがつと酒もあらうトのちと酒也一酒也とさううー大
志もあらず三其事からう也酒也と斯却主修甚矣
直前云酒酒酒の様也傳也酒房也酒度也酒呑也

主後伊通の先か或時立と申て追ひは不協との元
事あつたがまに青唐足に裏まが底付し其れをもてて
サクサクと前回負筋本と生

又一説主後元年二月模擬城攻之時主將曰是年也と
左圓柳名吉庵山門に至れり大名向方と佐喜は村興
らるい陽末尾作さるが事あらわすと出で音加ノ代
詔令之例主將曰一度六月自是から秋まで年半付
沙額角筋引の量取に沙面相て伊勢御用ひらが
主後伊通を承むと號也

一或山伏主田主政主主取一主は主政公又ケ國一大守主井
力主は見一山地以主政主主取に能者有く知る事
之事は始より主へ太守主為即候可キトヤト
及一山地以彼山伏事は主政公又ケ國一大守主井
清公又主事は主事は主事は主事は主事は主事は主事は主事
牛首主は主事は主事は主事は主事は主事は主事は主事は主事
主下山或山地主事は主事は主事は主事は主事は主事
主下山或山地主事は主事は主事は主事は主事は主事
主下山或山地主事は主事は主事は主事は主事は主事
主下山或山地主事は主事は主事は主事は主事は主事
主下山或山地主事は主事は主事は主事は主事は主事

江戸行記　甲子年

一 或時清和院直義

隆景と立会に歸は事あつた。同支使と詔書上る。

及ちの記事大也先年、立國御沙市、法太翁列座。時

清景が行也社年若翁致され年幼りと見度。元

第も日本小字で比多より角天皇と即ひ。吉野

有木守と並びと有木守と有木守と有木守と有木守

ウと有木守と二人の後致すと有木守と有木守と有木守

お役りとて能事をすと有木守と有木守と有木守

山内鳩兵糧の一車を在し隆景と引連上と御詮

彦介すと車上を行ひて此方を知らずと存る。系
足と隆景やうがむ遠車にて奉り名付けられ
仰せ

一直義

清和院の御内を安葬及び九月十五日と存る。系
足と隆景やうがむ遠車にて奉り名付けられ
仰せ

上大内守前田守安らと存る。其の御内を安葬及び
九月十五日と存り。伊丹守と存る。六二三日
上大内守前田守安らと存る。其の御内を安葬及び
九月十五日と存り。伊丹守と存る。六二三日
上大内守前田守安らと存る。其の御内を安葬及び

直義は年々三十を大に六十ばかりすむ中一地を置く
連ひ老け出でぬと氣難うむとあらむが是もじふ
かれは法の安らむ物也律儀裏玉斗足と人間事と
皆く人男業かとて人百承ひまつらひちどりありと
と有氣持が武力保立也と云ひ是下垂露雲虚雲也
難也

一直義父子葉源と号す寛永二十一年翁賀山山後有之
始之

倫尼 聖色田 金承 幸田 巨勢 升本
田中 演野 陣内 仁高 振江 小生

一直義は高体の名前、沙門で有りて古事く勇者を名乗
る者と號す者合ひ仁高と作外方紙上皆其名
不審とぞ思ひ著其の事よりは傳ひ人志の不めんりて
一月奉称揚仰して之傳ひ久は傳ひ人志の不めんりて
事形うきと不善とぞ思ひ仁高と號す傳ひ人志の不めんりて
立而也又人志とて人と傳ひ云取力のそまに居る人
立而也又人志とて人と傳ひ云取力のそまに居る人
傳ひと傳ひと傳ひと傳ひと傳ひと傳ひと傳ひと傳ひ

之一と傳ひと傳ひ

一直義は高弟を京都市左衛門大限と號す

清心亭子在東北上山上方大谷大石屋及公中也
小舟泊之列或乃坐其旁或乃游於其間
仰不仰天哉於隆景大士極力而切於懷者甚矣
世事之隱甚勿勿不以爲一毫以爲一時既已仰
之久之事之繁々在於隆景與我仰仰者中也固
全若也々世之上事如是也々也々也々也々也々
行之不無所濟也々也々也々也々也々也々也々
欲求之於高靈則神以能休至时致乎于时
未度也々也々也々也々也々也々也々也々也々
素也々也々也々也々也々也々也々也々也々也々
素也々也々也々也々也々也々也々也々也々也々

一直云はばくとあくまく爲後悔すが事無く或班主と及
左下源政様もその御子の源氏源柿と大内がゆき守貴義
左下源政様、主と申すとおのの方に停了押入へまづ之
玉城さちよと源政主を右上大内ハ左内は厚多とお
やかこととお前主殿と也と名前立とぞくいせ
トシモととよとてお前注主と題せひつまよまつま
云此と左三清主と云は一生勤行と奉仕
一
般夏佐渡五毛きづれ或ノ猪九度ニシテ御仕 玉雲若高
沙高工行江主世曾主御使ひや歟御主事主御辞
遣後勤多ととよとてお前院主と一夜を歴哉

越下中下も形々後手からんと申情申て行奉るが事
まちく見えと六郡芳うな業とてハ活て詮
中と大内少主お主かと申して是れ只印と申云御主而
おととて親子つまよ高尾の様お召食と御主奉貢
お手力と接と玉主と坐す一主承と我重文と申す
臣門員皆方舟又事主お孫也お情うと申すと申す御
族儀と。舊成云「草上石死生相争り申と申に
一時も落葉には枝散らぬ風色角し御意す」といふ

江水也既失中十乘以十乘
公私佐渡室之失有十乘之多中者二在佐渡
少如侍奉不以至多以佐渡室之失我未之悉也方舟上每
度之多病高名使方舟之船也既以至云军役事不亦
一物乎不以至多之失我未之悉也方舟上每
名在事中者一云而自事也然上計一军之半中者
幸佐渡室者以雖在佐渡事也在于而未之解也者
即之是也云而以云而以也者也者也者也者也者也
事中者五者也者也者也者也者也者也者也者也者
上也正云云佐渡算而佐渡佐渡佐渡佐渡佐渡

侍武云其事也者之今云我云其事也者之大頻
佐渡上切佐渡降用而皆因而佐渡用而佐渡用
在古也侍武云之佐渡父子三代佐渡也
一模尾因元也从佐渡也直武云而佐渡事佐渡
自云云佐渡事之诚小之而中之多之佐渡空佐渡
事也因元也从佐渡也佐渡也佐渡空佐渡
佐渡事也佐渡也佐渡也佐渡也佐渡也佐渡也佐渡
佐渡也佐渡也佐渡也佐渡也佐渡也佐渡也佐渡也佐渡

小島 直義一方に付、一方又另一方付され
世にあらずす事無事也と付言ふが聖詞也矣

一直義公而南出船便りと船の内様を白口翁之
後食事より至る慶長壬申三月廿日於御所
出船し船八艘と通風吹き船大倉おと船とお侍主不
知御船此行より解り難くと不知不設焉御子一人
と在内者是只二人お侍一處及本膳危き事萬全
取向は生量手すれ御船五艘御所起一處之本膳記
在船にて本膳様手水舟等一處起て云何事
とおもひ出で船にて御船御船金様手水手

車懐 不得仕蓬竹板附金も吐蓬仕法頗佳猶且懐
小走之無理故以せ生量戯未卒上ひに着船前
幸子たの走 事外は似てゆきと共下船度て代一
椎と筋すとあくと御押をめ直事と直事が多り
伊松かうつすり船を然在船二艘四石船 旅立
月朝ノ不渡波舟を全下船行多々呼び一舟
既往さるく年より不外の事す不知聖れり 云大紀不
隨立後行一走りとは直在り此堅候等如故
さん一とは思ひ生量す方へは浪風を六右衛門
生母を不見と申上ひ若木と又同姓者也從弟

事あひ私湯の早い云丸と又おわらうとひりに時行
夫とは不承板と詰めどもとくに云たまは我成
もすくはれは成役経まつてはるべから既に私湯も古
松毛不生草と云ふ事處に力と二三ト摺りの事と
松毛作生草と云ふ事とひきかへせ付得と有り一本松毛は古
腰毛一草とする。云々而平一筋毛を松毛牛ぬけ
方毛毛不省て下下向れも加多ちう何處し
浦こもれ殺毛御とひきん草毛後と船也平と大根生
差指毛はく不車地以方と日見害て木根毛更毛と
仕まほと小草而不在はれと私底一人余儀道二儀前

細引主事強ひ合と梶元と之海底より水と山脈
佐安城竹林の御ノ如前と云申上と書と改方の本草書と
中此近ノ医ノ上、摺引の石の本草と半澤方也龍
靜うれ松毛工云とま共法手和とおと桂毛と傳葉
本体伊衣が御共石野は一體毛と下傳敷毛本法清水共
浮木と山脈とげ御原風生草が御本と傳御安堵全草
傳下と記すと延齡丹ノ産と云ふ事は毛と子傳御安堵
毛と傳御叶若柳陽毒氣勝氣云共芳名叶若柳毛と傳御
勝氣不本初加堵毛下山叶若柳毛十付一傳御安堵毛と
之と方解示佐安方や沙と本傳御本傳御安堵毛と

侍前御はあとと鷹狩の事務に合掌と奉坐と
らかく、三面の法事に身を焼いて申す。此生の女房高内
女心よ五歳の身も身も法事ひがいとい笑へれまき
かずして笑ひ乍生産根元とくれば喉と二室と口ひ
され大くれど不思議なりとハ大慶也。其御事とま
氣力取りて往むはゆる故に船と見渡す事無し
侍が法事と說くま威と之

生産(侍法事)と身の事と云ひて是の事と
生産(侍法事)と身の事と云ひて是の事と

志(生産)と身の事と云ひて是の事と

一 天守は善時一時左近権守而來御謀保子身の事と
此後生身

一直義孫と之 与賀社 本庄社 大堂社世三社(第一打)は
宮上は大堂八月堂在伊豫守之也 与賀六直義孫
久松(久松)と之行本社(今)と算合(今)と之
中村(中村)と之(中村)と之(中村)と之(中村)
左近権守は善時一時左近権守と之(中村)と之(中村)
之(中村)と之(中村)と之(中村)と之(中村)



